

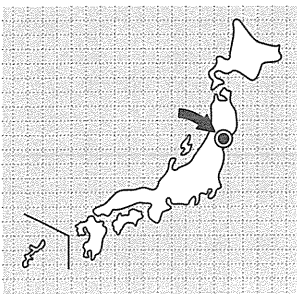
シリーズ
子どもが育つ
場所から

新園舎で暮らす二つの幼稚園を訪ねて



▲唐桑幼稚園

▼大谷幼稚園



大谷幼稚園・唐桑幼稚園（宮城県気仙沼市）
 おおや からくわ
 東日本大震災から四年。震災の影響は形をいろいろに変えて表れていることですが、新園舎は明るい光で子どもたちや地域を温かく照らしているように感じました。その中で暮らしぶりや交流の様子をお届けいたします。



今号のレポーター
 お茶の水女子大学附属幼稚園
 伊集院、上坂元、渡邊、高橋（文責）の4人で訪問しました。
 昨年度に続いての訪問を快く迎えてくださり、子どもたちとの交流も楽しみました。

気仙沼市を訪ねて

大学のプロジェクトの一環で、昨年度に続き気仙沼市の幼稚園を訪問することになった。前日、担任していた年長組の子どもたちにそのことを伝え、私たちの園の遊びや生活を紹介するポスター（教師が写真を貼り、そこに子どもたちが言葉や絵を添える）を十数人と書いた。降園前の集まりで、完成したポスターをクラスのみんなに見せると、「どんな誕生会なのか聞いてきてね」「チャボを飼っていることを言ってきてね」などの言葉が聞かれた。遠い地の幼稚園に思いをはせ、知りたい、つながりたいと思う子どもたちの気持ちを受け、ポスターと言葉のメッセージを持って二つの幼稚園を訪ねることになった。

保育を終えた私たち四人は、東京駅に向かった。東北新幹線に乗って二時間、一ノ関で大船渡線に乗り換えてさらに一時間半、気仙

沼駅に到着した。そこからタクシーで約十分の所にある高台の宿に向かい、翌日の大谷幼稚園と唐桑幼稚園訪問に備えた。翌朝、気仙沼湾の向こう側に昇る朝日に照らされ、港町の町並みを見渡すことができた。震災から四年の歳月に思いを巡らせながら、この日出会う子どもたちや先生方との交流に期待が高まった。

*お茶の水女子大学と気仙沼市教育委員会との共同研究



▲気仙沼湾の日の出

大谷幼稚園

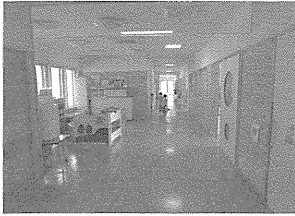
大谷幼稚園は、先の東日本大震災で津波の被害を受け、建物内に土砂海水が入り込む甚大な被害を受けた幼稚園である。先生方はじめ地域の方々と、保育を早く再開しようと片付けに尽力されたが、「幼児にとつて安全は最優先」という教育委員会の決定により、小

中学校と一緒だった元の場所よりも高い土地に新園舎を建てることになったそうである。

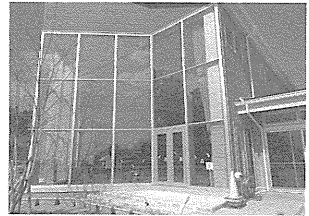
平成二五年九月に、間借りしていた小学校から新園舎に移転した。

外観も室内もとてもきれいで、窓が大きく取られ、木の床、壁は薄い色合いで明るいイメージだった。園長の齋藤先生のお話によれば、安全性は確保されたが、小中学校の校舎から離れたことで、卒業生の成長を身近に追えない寂しさや、学校の養護教諭をすぐには頼れない心もとなさを感じているという。

園舎の事以外にも、園児・保護者の現状についての話を伺った。



▲広い廊下



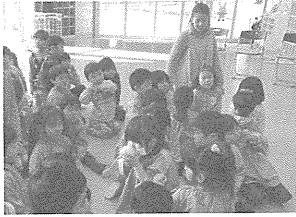
▲園舎外観（大谷幼稚園）

印象的だったのは、「四年がたち、インフラは整備されてきたが、思ったように復興が進まず、以前よりも心が落ち着かなくなっている」という話だった。卒業式を一か月後に控え、お休みがちな子どもがいるという。幼稚園側は来てほしい。親も連れていきたいと思っている。でも、力がわかず行動に移せない状況になってしまっているという。また、大谷幼稚園に限らず市内の幼稚園職員の中にも震災の影響がじわじわと大きくなってきている事実もあるという。気持ちをみんなに伝える機会を持ち、共有する、一人で抱え込まないようにしていくことが大切だと切に感じているとおっしゃっていた。

大谷幼稚園の子どもたちとの交流

園長先生のお話を伺った後、全園児が集まるホールに案内された。そこで私たちの園の子どもたちや保育の様子を直接伝えることに

なった。園庭での遊びの様子、チャボのお世話の様子、「スベシャルまつり」という年少組を楽しませる取り組みに向けての準備や当日の様子を、写真を見てもらいながら伝えた。



▲夏ミカンの匂い、よい香り

ポスターの中に、夏ミカン採りをしているものがあつた。様子を伝えた後、みんなにプレゼントを持ってきました、と夏ミカンを取り出し、手渡した。子どもたちは大切に両手に持ち、鼻を近づけて匂いをかぎ、次の人へと丁寧に渡していった。五感を働かせて初めて出会う物を丁寧に感じ取ろうとする興味関心の心持ちを確かに感じた。



▲私たちの園の様子を知らせる

その後、いよいよ私たちの園の子どもたちからの質問をさせてもらった。「何を飼っていますか？」との問いに「どじょう!」。その他にも質問していると今度は「何でおまつりをしたのですか?」「どんな誕生会をしますか?」等の質問を受けることになった。少しずつ関心が広がり、本園の子どもたちを身近に感じてくれたようであうれしく思った。

子どもたちとの交流後、私たちが園舎内を見学していると、早速夏ミカンを少しずつ分けて食べたとのこと。職員の方もつながりを大事にしてくださいとうれしく思った。

園庭に出ると、サッカーや縄跳び、砂場などで思い思いに遊ぶ子どもたち。誘われて一緒に遊ぶことになった。短い時間ではあつたが、子どもたちの開かれた心、夢中になって遊ぶ様子



▲園庭の様子 (大谷幼稚園)

に触れることができ、何の心配もなく穏やかな心持ちで元気に遊べる環境を整えることが大人に求められていると深く感じた。

唐桑幼稚園

唐桑幼稚園は震災で園舎が使えなくなり、唐桑小学校に間借りして二年を過ごし、その後、平成二五年六月に新園舎が完成している。坂を上り切ると、落ち着いた趣の園舎が見え、職員の方々が出迎えてくださった。園内に案内され保育室をのぞくと、昼食の片付けをしているところだった。年長児の在籍は二名とのこと。年長組の保育室には二人による手作りの紙芝居「ようちえんってどんなところ」が置いてあった。また、廊下には地域の「いいものみつけマップ」が張ってあった。紙芝居は、次にこの幼稚園に入ってくる園児たちに幼稚園の事を知らせるために作ったとのこと。そしてマップは、地域に繰り返し出掛け、

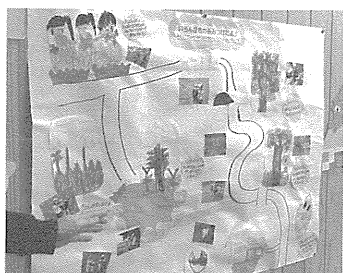


▲ようちえんってどんなところ

のポスターをもとに話をしていると、一人の男児が部屋の片隅を指差し、そこに何か大事な物があると話してくれた。私たちの園の話聞いて、自分の幼稚園の大事な事を知らせたいと思い、伝えてくれたのだろう。また、誕生会について尋ねると、「自分たちで司会して、ゲームとか考えてみん

そこで出会った自然のことや、関係性を広げたいと行っている松園幼稚園との交流について描き込まれているものだった。

食後の片付けが終わった年長児と本園



▲いいものみつけマップ

なでやる。誕生日の子の欲しいプレゼントを聞いて作ってあげる」と教えてくれた。

誕生会の持ち方や紙芝居作成の話聞き、自園の文化を継承していく大切さがきちんと子どもたちに伝わっていると感じた。

身近な地域環境とのつながり

参観後は、園長の小野寺先生と研究主任の工藤先生から、研究のお話を伺った。

新園舎になった当時、砂場でごちそうを作っても、飾りになる葉っぱなど何もなかった。そのことが一つのきっかけとなり、地域に出掛けるようになった。その後も日常生活の中に豊かな自然、地域の良さを活かした経験を、たくさん取り入れているという。最近では、牡蠣^{かき}の養殖場に行ったり、打ちばやし保存会の皆さんや小中学生から太鼓を教えていたりしたりしたことである。

地域に出掛けていくことにより、地域を知

るだけではなく、そこから得た感動を再現する力、気付いたり互いに高め合う力、温かい気持ちや優しい心の芽生え、意欲などにつながったと、まとめられていた。

四年たつて震災直後とは違う問題が出てきているという。しかし、自然豊かな環境を活かし、地域とのつながりを大事にしていく教育を実践されている職員の方々のご尽力により、子ども笑顔、元気な姿はしっかりと守られていると感じた。今後子どもたちの生活に根ざした交流を継続できたらと願っている。

— 訪問メモ —

訪問時期：2015年2月

訪問場所：気仙沼市立大谷幼稚園

〔住所〕宮城県気仙沼市本吉町寺谷 9-2

〔電話〕0226-44-2203

気仙沼市立唐桑幼稚園

〔住所〕宮城県気仙沼市唐桑馬場 143-1

〔電話〕0226-32-2299